

〔病・虫害発生概況〕

〔病 害〕

昭和50年度の病害発生状況は、水稻では葉いもちは終息が早く、白葉枯病も少発生に経過したが、紋枯病および糶枯細菌病が多発したことが特色である。わい化病はツマグロヨコバイ防除の徹底で、発生はさらに激減した。ムギ類では赤かび病が全般的に発生したが、5月中旬以降の天気の回復で2次感染が阻止された。野菜類では、ウリ類に菌核病、灰色かび病、トマトに軟腐病が多発した。南西諸島ではサトウキビ黒穂病の発生が拡大した。

稲 病 害

葉いもちは好天のため上位葉への進展が阻止され、穂、枝梗いもちも全般的には少なかったが、9月中旬の曇雨天で北九州の中山間部を中心に発生をみた。紋枯病は8月までは病勢の進展はゆるやかであったが、9月上旬～10月上旬の異常高温により急速に進展し、例年にない多発となった。そのため、中晩生種では9月中、下旬まで防除が行われた。この高温の影響は糶枯細菌病の発生にも連なり、早生および中生種を中心に多発生となり、一部でかなりの被害がみられた。白葉枯病は好天に恵まれ

昭和50年度 水 稻 主 要 病 害 虫 の

病 害 虫 名	福 岡		佐 賀		長 崎	
	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積
(病 害)						
苗 い も ち (苗 代)	24	209	1	580	170	250
葉 い も ち	17,900	55,520	29,600	26,157	11,000	17,000
穂・枝 梗 い も ち	56,681	103,092	25,000	71,357	10,000	15,000
紋 枯 病	60,295	91,905	30,000	52,734	17,000	19,000
白 葉 枯 病	6,131	4,197	1,650	12,563	1,500	2,000
萎 縮 病	51,379	} (ツマグロ)	10,500	} (ツマグロ, メイチュウ)	12,000	28,000
縮 葉 病	8,850		250		3,000	2,500
黄 萎 病	0		—		0	—
わ い 化 病	1.2	—	1	—	1.8	—
ご ま 葉 枯 病	15,332	(穂いもち)	7,200	—	8,000	—
小 粒 菌 核 病	—	—	250	—	4,000	500
糶 枯 細 菌 病	41,484	—	12,800	—	9,000	—
(虫 害)						
ニカメイチュウ (第1世代)	1,960	(ツマグロ)	1,450	29,031	3,000	13,000
〃 (第2世代)	3,988	(トビイロ)	100	34,941	2,000	9,000
セ ジ ロ ウ ン カ	62,581	(ツマグロ)	7,000	(ツマグロ, メイチュウ)	20,000	(ヒメトビ)
ト ビ イ ロ ウ ン カ	70,391	141,724	37,000	54,351	19,000	49,000
ヒ メ ト ビ ウ ン カ	17,320	(ツマグロ)	3,000	(ツマグロ, メイチュウ)	6,000	—
ツ マ グ ロ ヨ コ バ イ	71,650	92,878	48,000	41,681	19,000	9,000
イ ネ ツ ト ム シ	—	—	340	243	—	—
コ ブ ノ メ イ ガ	65,155	101,761	37,000	56,763	22,000	34,000
フ タ オ ビ コ ヤ ガ	—	—	—	—	400	—
ア ワ ヨ ト ウ	313	—	20	—	100	—
カ メ ム シ 類	4,850	10,144	550	4,012	3,600	9,300
総作付面積 (計 360,653)	78,410		48,500		27,800	

注) 防除面積は延面積を示す。() 内は同時防除の病害虫名(略記)。宮崎・鹿児島は

たことと、台風の被害がなかったことから全的に発生は少なかった。萎縮病の発生はツマグロヨコバイ防除の徹底で平年以下の発生となり、減少傾向を示している。わい化病は、前年よりさらに発生が減少した。縮葉枯病の発生は暫増傾向がみられるが、これはムギ類の作付増によるヒメトビウカ発生量の増加のためと思われる。黄萎病は熊本および鹿児島で発生が続いている。

麦類病害

4月中旬～5月上旬に高温、多雨、寡照に経過したため九州全域で赤かび病が発生したが、5月中旬～6月中旬に天候が回復したためその蔓延は阻止された。しかし水田裏作ムギを中心に枯れうれが進行して粒の充実不良となり、赤かび病とあいまって被害は平年より多かった。赤さび病、小さび病の発生は少なく、黒さび病は特に発

生がおくれて微発生にとどまった。うどんこ病は福岡、佐賀、大分で少発生、長崎、宮崎、鹿児島で並であった。

野菜病害、果樹病害、その他

冬季ハウス栽培キュウリに斑点細菌病が多発した。ナス、キュウリ、イチゴに灰色かび病が全般に発生し、スイカつる枯病が多発した。トマトの疫病は梅雨が早くあけたため少～並の発生であったが、ウリ類にうどんこ病、菌核病が多発し、高冷地野菜には軟腐病が多発した。長崎、宮崎では4月の天候不順10月の高温多雨でウリ類はべと病の多発生となった。福岡では夏秋キュウリにアブラムシが発生し、キュウリモザイク病が多発生となった。宮崎ではアブラムシの飛来数が少なく、ウリ類のモザイク病は少発生であった。長崎ではジャガイモ疫病が秋作に早発多発した。また、青枯病の多発が続いている。大

発生並びに防除面積

(単位: ha)

熊 本		大 分		宮 崎		鹿 児 島		沖 縄	
発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積
25	100	48	512	170	1,800	126	413	—	—
13,520	22,000	30,070	24,500	28,774	33,400	20,950	48,690	833	3,083
17,902	70,000	32,280	50,000	29,018	16,740	17,058	63,260	448	1,319
37,662	50,000	42,090	40,000	33,887	47,250	24,165	38,650	424	712
8,151	10,000	8,300	4,100	15,602	16,000	5,820	3,495	41	40
24,344	} (ツマ グロ)	26,390	} (ツマ グロ)	19,315	} 13,800	23,612	75,900	—	—
2,250		6,310		1,198		802	—	—	
550		0		1		810	—	—	
—	—	—	—	10	—	10	—	—	—
4,525	(穂いもち)	18,741	(穂いもち)	2,600	0	4,770	—	147	709
3,912	—	18,320	—	—	—	2,830	—	—	—
—	—	3,490	—	200	—	1,354	—	—	—
8,100	12,000	13,670	15,500	9,026	15,239	5,051	13,400	74	709
8,500	9,000	4,755	10,500	3,283	16,000	2,735	9,630	—	—
21,500	30,000	19,180	12,600	25,452	26,600	25,496	43,234	299	2,201
25,100	72,000	18,340	24,000	28,767	45,700	24,365	76,000	332	1,061
6,500	5,000	8,600	6,800	20,336	5,000	2,760	24,620	—	—
25,800	65,000	31,510	29,300	34,316	66,000	30,326	41,150	655	2,548
1,800	—	3,640	50	—	—	690	—	—	—
27,500	60,000	33,020	16,800	28,770	59,270	26,866	49,882	410	744
450	—	6,090	5	3,409	—	3,350	—	—	—
950	—	5	—	—	—	—	—	12	—
10,650	12,000	5,660	12,900	10,400	31,800	2,797	16,284	171	47
71,900		46,200		38,600		47,600		1,643	

早期も含み、沖縄は一、二期作の合計を示す。

分では夏秋トマトに細菌病害が多く、ピーマンうどんこ病が多発生した。鹿児島のエンドウにこうがい毛かび病、褐紋病、褐斑病が多発した。南西諸島のサトウキビ黒穂病は発生が拡大し、採取焼却が行われた。

かんきつでは、6月中旬以降落花期にかけて降雨日数が多かったため、春梢に対するそばかす病およびかいよう病、果実に対する黒点病の発生が多かった。大分ではナシの黒星病、佐賀ではブドウの黒とう病が多発生したが、これはいずれも6月下旬の多雨と高温が発病を助長した。茶では綱もち病が2、3番茶に発生が多かった。

〔 虫 害 〕

各種作物とも栽培法や周辺環境の変化に伴い、害虫の発生様相に問題が多い。すなわち、水稻では田植機による稚苗移植の急速な普及(昭和50年九州での普及率65%)、野菜類では生産団地の固定化及び施設の連年使用による連作障害や土壌害虫の多発、果樹では廃園による害虫発生源の増加等があげられる。これらはいずれも最近の農業事情が反映しているところで、更に生産意欲の低下や兼業化に伴う防除体制の崩壊もあり、単に技術だけでなく行政との緊密なタイアップによる総合的な対策が望まれている。

水 稲

全地域でトビイロウンカとコブノメイガが多発した。両虫とも飛来時期は早く、飛来回数も多く、飛来後虫の発育は不整一で、防除適期の把握が困難であった。更に、本年は残暑が永く続いたので、虫の増殖は稲の成熟期まで盛んで、被害が拡大した。トビイロウンカの発生面積は22万ha、コブノメイガは全作付面積の2/3に当たる24万haで、昭和42年に次ぐ大発生となった。トビイロウンカは株の下部に生息しており、稚苗移植による過繁茂が粉剤の効果を低下させているようで、散布法や剤型の検討が必要である。

近年のニカメイチュウの少発生とは対照的に、各地で中山間地を中心にイネゾウムシの発生が拡大し、被害も多い。生態研究と防除法の開発が望まれている。全国的に問題となっているカメシ類は、九州では特に異常多発はないが、慢性的な重要害虫となっており、発生面積は45千haに及んでいる。

畑作物・野菜

九州において最も大きな問題は南西諸島でのウリミバ

エの発生地域が年々拡大していることで、50年10月にはトカラ列島北端の中之島(30°N)で発生が確認された。現在、大隅諸島が警戒防除区に、鹿児島県本土南端が警戒調査区に指定され、誘致トラップや寄主植物による発生確認調査が行われている。一方、沖縄県では47年から久米島において誘引剤とCO⁶⁰放射線による不妊虫放飼法を併用したウリミバ撲滅実験事業を実施しており、その成果が期待されている。

野菜類では特定地方の特定病害虫が問題になっている。すなわち、生産団地の設定後の連作により、病害虫が常発化しており、特に塩素剤使用中止後有効な薬剤がない土壌害虫(ヨトウムシ、ハリガネムシ、ネアブラムシ、コガネムシ)は各地で多発している。このような現象は施設内の連作でも同様で、生態的防除と有効薬剤の開発が急がれている。そのほか、ウリ類にアブラムシ類(モザイク病)、ウリ類やイチゴにハダニ、各種野菜にハスモンヨトウが多発したところがあった。ハダニは一部の地方で薬剤に対する抵抗性が発達している。南西諸島ではサトウキビにバッタ、ネズミの被害が多い。

果 樹 ・ 茶

本年特筆されるのは各地でミカン、カキ、ナシ、ブドウに7~8月チャバネアオカメムシが大発生し施効果の落下が多く被害激甚であった。本虫は2、3年前から発生が続いており、各地で定着、常習化しているようである。クリタマバチは抵抗性品種の感受性化により多発傾向で、また発生面積も年々拡大している。クリのカツラマルカイガラムシは最初大分県で発生が確認されたが、近年は隣接県へも逐次及んでいる。また、北九州ではミカンハダニの薬剤抵抗性の発達が顕著で、発生地域も拡大している。

以上のほか、地方により局部的に多発した果樹害虫は、ブドウのチャキイロアザミウマ(福岡)、カンキツのスグリゾウムシ、ミカンヒメコナカイガラムシ(以上大分)、クリのゾウムシ類(宮崎)、ナシのカワモグリガ(大分)等があった。近年発生が多かったカンキツのクワゴマダラヒトソは各地で少なく、また種子島、屋久島のミカンコミバエは誘引剤による連年防除の徹底により、ほぼ撲滅に近い状態になった。

茶樹では、一番茶期にウスミドリメクラガメ(鹿児島)、二、三番茶期にチャノホソガ、カンザワハダニ(以上福岡・鹿児島)、チャノキイロアザミウマ(佐賀)、クワシロカイガラムシ(鹿児島)が多かった。

(九州農業試験場 環境第一部)